



いわいしま通信

祝島の植物が上関町の天然記念物に指定されました

橋部 好明

上関町教育委員会では、この度、平成16年1月14日、上関町文化財調査委員会の答申を受け、下記の4物件を上関町指定文化財(天然記念物)に指定しました。祝島のヤマザクラとココウについて、天然記念物ではなく、他の項目に指定した方がよいのではと言うことで、継続審議となりました。近く指定出来るよう、引き続き努力します。他にも、練堀の街並み、石垣など、石の文化財についても、進行中です。

1月20日、山口県植物学会会長と三浦地区の山中腹あたりを、調査したのですが、ヤマザクラ、カゴノキ、ケグワ、エノキなどの巨木、山中に突如現れた山城見たいな大石垣を発見し、祝島はスゴイとつくづく感激しました。

なお、私のHPにも情報を載せていますので、よろしければ見て下さい。

「祝島フォト情報」

<http://www.iwaishima.jp/hashibe/>

目次

天然記念物指定	1
祝島の歴史を探る	2
魚・さかな・肴	4
会員リレーコラム	5
花*花クイズ	5
祝島懐かしの料理	6
Let's learn English in Iwaishima!	7
お知らせ&募集	8

祝島のアコウ



本種は、亜熱帯に植生する南方系の常緑樹であり、本州では和歌山県と山口県に分布する。祝島海岸道路

(県道三浦線)の地名: 通矢の大断崖に張り付くようにして、約30mの間に大木が7本ある。他地区のものより、はるかに大きいのが危険なため計測出来ない。祝島は、東和町水無瀬島などとともに、アコウの北限地帯である。

祝島のウラジロガシ



本種は、暖地性の常緑広葉樹で、本州に広く分布している。樹命は長く大木・巨木も多い。農道北野線の

中程の道路下2~3mの所に一根で繋がった約4mの範囲内に、双幹と単幹二本が生育している。目通り幹周(150mの高さ)幹4本、計約600cmもある。

祝島のカンコノキ



本種は、自然海岸に希に生育しているが、最近は激減しているという。日本での群生は大変まれである。

所在地は、さき北野地区の水田法面、延長30mの範囲に根元周り、70cm~150cmのものが、17本生育しているのが確認された。

祝島のケグワ



本種は、中国や朝鮮半島、西日本の山地の川沿いに生育している大陸系の植物とされているが、祝島では、至る所に生育していて、三浦地区には特に多い。祝島には山口県の天然記念物に指定されている巨木があるが、当ケグワは、県指定のケグワほど巨木ではないが、樹勢がよい。目通り150cmと160cmの双幹で

樹高約20m余ある。

まりつき



祝島の昔の遊び「まりつき」
絵・しげむらみちこ

<連載> 祝島の歴史を探る(8) ~ 古代の航路について ~ 蛭子 葉子

民俗学者・宮本常一氏の著書に"われわれの体験してきたことは、生まれてから今日までのほんのわずかの期間にすぎないがその体験した文化には長い歴史と広いひろがりがある。"という印象的な言葉があります。最近、平さんの石垣が話題になっていますが、宮本氏はその著書の中で石工の話に心をうたれるものがあるとして"平凡だがこの人達はこの人なりにひとつの人生観をもっている。だれに命令されるでもなく、自らが自らに命令する尊さをこの人達は自分の仕事を通して学びとっているようである。権威のまえには素直であるが権力には屈しない。そういう人間的な生き方をもってみるとこの人たちに恐ろしいのは権威であり真理だけであるようだ。積み上げられた石の一つ一つの中にはきっとそういう心がひそんでいるのであろう。そしてその総和が目のまえにある「かたちのある文化」なのだ、と思う。"と書いています。

平さんの石垣は、取り残されていくものを見直さずきかけとなり、その力に圧倒されながらも自分達を形作ってきたものの背景を考える機会になりました。そしてそれを知ることによって私達が経験しえなかった文化に触れることができました。祝島には石垣積み話に限らず、山の話や漁の話など島の人達が長い時間をかけてつちかしてきた技術や知識がたくさん受け継がれています。そこには自然に親しみ、自然の怖さを知り、その中から習得した知恵や、たくましい生きるためのエネルギーとその生き方、先蹤文化をどのように受け継いできたかなど、私達が教えられることがたくさんあります。

今回はそういう身近にあるものに歴史をひもとく力があるのではないかと思った村上磐太郎氏の『周防灘圏の上代交通路と邪馬台国』という本から祝島の歴史について考えてみたいと思います。

村上氏は歴史の先生でもなんでもない伊陸に住むお百姓さんですが、宮本氏のいう"体験した文化には長い歴史と広いひろがりがある"ことを知っている人です。農業のかたわら丸太船に乗って海に出ることを楽しみとしていた生活の中から、氏が長年考えてこられた古代交通路と邪馬台国のことを一冊の本にまとめたものです。村上氏は九州北部を邪馬台国と想定、周防国を「投馬国」とし、魏志倭人伝に書かれた航路についての

見解を述べています。周防灘を熟知した村上氏は潮の流れに沿って文献にみる周防灘の上代舟路として神武天皇東征路、景行天皇の西征、小野妹子の帰朝などについて述べた後、魏志倭人伝の順路に従って倭の国々の位置を示していきます。すごいことに!?それらの航路はいずれも祝島を通過しています。

では祝島の記述がある「上代舟路」から抜粋して以下に記載します。

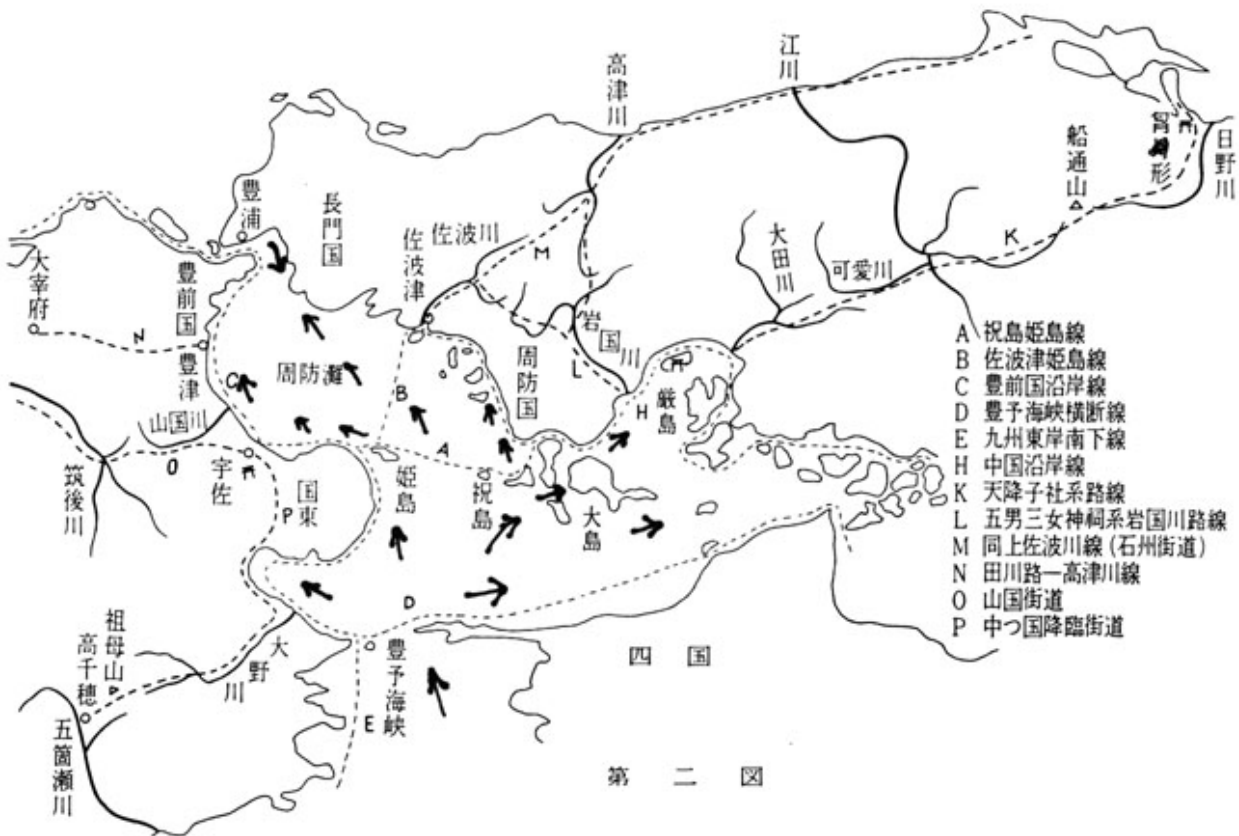
瀬戸内海の潮流は太平洋の潮の満干によって、東の紀淡海峡、西の豊予海峡の両入り口から流入し流出する潮の動きによっておこり、豊予海峡を入ってきた上げ潮は右の伊予灘と左の別府湾に別れ進んでいくが、そのまま真直ぐに周防灘へ侵入する潮は、祝島のあたりで、東の安芸灘と、西の豊前の海岸に沿って上る潮と、更にそのまま北上して周防の海岸に寄せる潮となって進む。下げ潮となればこれと逆の方向の動きとなる。こうして周防灘の上代航路は潮流を巧みに利用して運航される。

奈良時代に開通されたと思われる長門沿岸の航路が開かれる以前の、都から海路九州へ入る旅はすべてAの姫島祝島線、Bの佐波津姫島線、Dの四国と豊予海峡の三線を通っている。その中でも九州と本土との交通路は、Aの姫島祝島線の航路が最初に通られたと思える。

A. 祝島姫島線

この航路は九州から都に上る最短路線である。周防の祝島と豊後の姫島を飛び石として、都までの航海中で一番広い海を渡るのであるが、両島間は潮流の全部を真目に利用するという訳にはいかない。

祝島と姫島の中央の地点において潮の転流時になる様即ち憩流時に中央を乗り切る形に時刻を計って姫島を出船し、少し流され気味に中央に出て、潮が上潮に転じて祝島に向かって流れ始めるに乗じて島に辿り着く方法をとったと思われる。この路線は都に上るに最も古くから通られている航路で、遣隋使の航路もこの路を通ったことが文面に伺われる。都から下るに一番広く且難所の灘なので、途中の安全祈願を祈って祝島出漕の時は神を斎い祭る故にその島名が起こり、灘



も"伊波比洋"の名があるという(摂津風土記 女島考)。「万葉集」十五巻の遣隋使が熊毛浦で歌った

草枕 旅行く人を 祝い島
幾代ふるまで 祝い来にけむ

の歌は、古き時代のこの航路を回想して歌われたものである。その遣隋使の船は、次に述べるB佐波津姫島線を通して北九州に渡っているから、この時代になると幹線はその方へ移っていったと思われる。しかしこの道は廃れたのではなく、九州へ下る最短距離であるから、室津半島から国東半島への帆船の航路は後世まで通られている。

動力で船を運航することができなかつた時代においては、潮や風にたよるしかなく他の歴史学者が書かれている書籍をみても、おおまかには村上氏のいう航路が一般的であったと思われます。

自然にたよる古代の航路は今の人々には意外な迂回路をとっており、それは遠い昔のことではなくて、ついこの間まで瀬戸内海航路の常識でした。しかし機動力の流入と共に航路は直線化し、昔の迂回航路は次第

に使用されなくなります。逆潮になれば船かかりして潮待ちをし、追潮になって漕ぎ出す古代の旅は、陸上交通の発展に伴いますます衰退していきました。西部瀬戸内海航路の迂回路については、邪馬台国宇佐説を最初に提唱した大分大学名誉教授・富来隆氏の『「邪馬台」女王国』の中にも同様の記載があるので紹介します。

"その昔、帆船で宇部大阪間を航行するには、夏は東風にのって国東沖姫島の南までおとし、(向風にまぎる)、国東沖から満潮の潮流にのって周防の祝島まで行き、祝島から櫓舟にのって上関に行き、そこからふたたび潮流と風向きによって東行きするのが一般だった。ずっと後の時代のことであるから、宇部から直接東向きする船もあつただろうが、主流は古代ながらの航路をとることが潮流風向等自然条件に適つてのことに違いない。"

その昔とは、昭和5年生まれの子が「櫓舟に乗り換えるのを見たことも聞いたこともない」ということですので、江戸から明治へ替わるまでのことではなかつたかと思ひます。このことから、祝島が古代のみならず幕末まで海上交通の重要な位置をしめていたことがお解り頂けると思ひます。祝島が潮待ちの港、舟を

乗り継ぐ場所であったという発見は、第1回目に書いた神功皇后、神武天皇、徐福も（実存すれば）島に立ち寄ったという伝承の信憑性を高めることとなります。そして幕末、潮待ちの志士達を手助けした廻船問屋があったのではないかという推測も同様です。

このように島の地理的要因と、そのことにより特異な文化を築くことになった『祝島』は瀬戸内海における存在を絶対無二のものにしています。

ここで不思議に思うのは、古代航路の中心であった祝島の島民が、仁安又は仁和まで穀物の作り方を知らなかったということです。今年は神舞年ということで、次回からこの神舞の起源、『祝島』の起源に関する歴史的背景について少し考えてみたいと思います。

徳山にあるマツノ書店をご存知でしょうか。村上氏の本はそのマツノ書店で見つけました。古書販売や山口県史料の出版などを手がけている書店で山口関連の書籍が充実しています。

その近所に、やせたら「小雪」似のKちゃんが勤める「昭月堂」というお店があります。甘いおせんべいを一枚一枚手焼きしてとても美味です。どちらもお勧めです。徳山にお出かけの際には是非のぞいてみてください。



マツノ書店

<連載> 魚・さかな・肴(8)

～コチ・タバコスイ～

木村 力



700gのコチ

「コチ」はあまり釣ったことのない魚ですが、この1月に伝馬船でサビキの釣り糸を漕いでいたらたまたま釣れました。刺身にするときれいな白身で透明感があります。唐揚げも旨い。煮付けも旨い。惜しいことにめったに釣れません。これから狙いたい魚です。砂地にいる魚で建網に時々かかります。

同じく砂地の、浅い所にいる魚で、コチの体によく似た小さい魚に「タバコスイ」というのがいました。いましたと書きましたが、最近見なくなりました。子どもの時には、東の波止の中の砂地や磯の砂地の所でよく釣れていました。頭のとっぺんに背鰭が1本出っ張っていました。「タバコスイ」というのは祝島の方言でしょうが、顔の表情が何となくとぼけて煙草を吹かしている感じなのです。よく付けたと感心する名前です。標準名は何というのかははっきり知らないのですが、にぎった感じから言うと「ヌメリゴチ」が似合いそうです。にぎるとぬるぬるしていました。「タバコスイ」も、唐揚げでも煮付けでもきつと旨いと思います。



コチのしっぽ



コチの刺身

会員リレーコラム(8) ~氏本長一さん~

このコーナーは「祝島ネット21」の会員の皆さんに、自己紹介を兼ねて簡単なコラムを書いていただくコーナーです。第8回目は、現会員の中で最も北にお住まいの氏本長一さんの登場です。



牛たちに囲まれて



冬の放牧



飼育パドック

「日本最北端の牧場の新年事始」

宗谷岬肉牛牧場長 氏本長一

日本最北端に位置する宗谷岬肉牛牧場の新年は、私が元旦の未明に牧用犬のマキを連れて牛舎を巡回し、2,500頭の牛たちに年始の挨拶をすることから始まる。

25棟の牛舎は暮れのうちに、地元の漁師さんたちに手伝ってもらって床に新鮮なオガクズを敷き換えてあり、牛舎に入ってゆくと木の香りが満ちていて清々しい。

牛舎内の気温は零下でも、寒さに強い牛たちはふかふかしたオガクズの上で、白い息をはきながら思いおもいの寝相で心地よさそうに横たわっている。

牛たちを驚かせないように、入口の扉をゆっくり開け、「今年もよろしくな。」と声をかける。

寝ぼけ眼できょとんとする牛。ガバツと起きて走り寄ってくる牛。首をもたげただけでまた寝てしまう牛。反応に個性が表われ、見ているだけでも楽しい。

牛たちもマキも、今朝から新年という人間の暦を理解しているはずはないので、家畜への年始挨拶は飼い主の自己満足だと一笑されるかもしれない。

しかし、彼らは人間の接し方に敏感に反応する。人間の側が気持ちを新たにし、牛たちへの接し方が改まることで、飼い主側の思いは自ずと彼らに伝わる。

牛たちに声をかけていると、人間にいのちを捧げてくれる彼らへの感謝の思いと責任感が新たになる。同じ思いを、牧場を支えてくれている消費者や地元の漁師の方々にも伝えたい。

<連載> 花*花クイズ(7)



前回の花*花クイズの答えは「ゲンノショウコ」でした。

代表的な和薬の一つ。腹痛や下痢の時、煎じて飲めば直ぐに効くから、「現の証拠」といわれてきました。

白花に薬効があり、赤花は効き目がないといわれます。白花と並んで植していると、赤が優性なので、そこらがみんな赤花になるので、出来れば、いくらきれいでも、不憫でも、除いた方がよいようです。排除の姿勢はいけないのですが、皆さんどう

思われますか？ 現に、町農道北野線では、赤花が目立って来たような気がします。

ところで、ゲンノショウコは、古代では、“太知未知

橋部 好明

久佐(タチマチグサ)”と呼ばれていたようです。飲めば、たちまち効いて来るからでしょうか？

サテ、今回の花は？

ほぼ日本各地の畑や道端などに生えてます。祝島では、周年見られます。



<連載> 『聞いてみん菜・食べてみん菜』

祝島懐かしの料理(4) ~かすどろ~

祝島・食べてみ隊

祝島のホームページで、雪景色の石垣に感激しましたが、この寒い時期にまず思い出す祝島の食べ物は、何と言っても「かすどろ」ですね。祝島ホームページの「何でもランキング」でも堂々2位に輝くこの「かすどろ」、冷えた体にはもってこい。ぼかぼか体の芯から温まってきます。

材料は、サツマイモと酒粕、それに砂糖の3つ。作り方もとっても簡単です。

さて、そのサツマイモですが、できればしばらく外に放っておいて、少々しなび加減になった物のほうが甘味が出ていいということです。祝島の昔のサツマイモは、外側が白く、焼くと、その中身は柔らかく、じわーっと汁がしみ出してきたものでしたが、最近こうした種類のサツマイモ、作られているのでしょうか。今回はどこでも見かける赤いほくほくしたサツマイモを使いました。

<作り方>

サツマイモの皮を厚くむき、サイコロに切ってゆでる。後でつぶすので、水はひたひたに。



別のなべに水を入れ、酒粕を味噌こしなどで漉しておく。



茹で上がったサツマイモをマッシュポテト状につぶす。すっかり形をなくしてしまうか、あるいは少し形を残しておくか、そこはお好みで。



漉した酒粕と、つぶしたサツマイモを合わせ、砂糖を入れ、混ぜ合わせると出来上がり。



とろ~りとしたかすどろが好きな方、さらっとしたかすどろが好きな方、いろいろだと思いますが、参考までに今回作ってみた分量を書き出しますと

サツマイモ	小4本
酒粕	150グラム
砂糖	2カップ
水	?

(酒粕を溶くのに使ったのは、多分カップ2 - 3杯くらい。サツマイモのほうは、ひたひたの水でしたが、この分量だと少し濃すぎたので、あとからカップ2杯ほど水を足しました。)

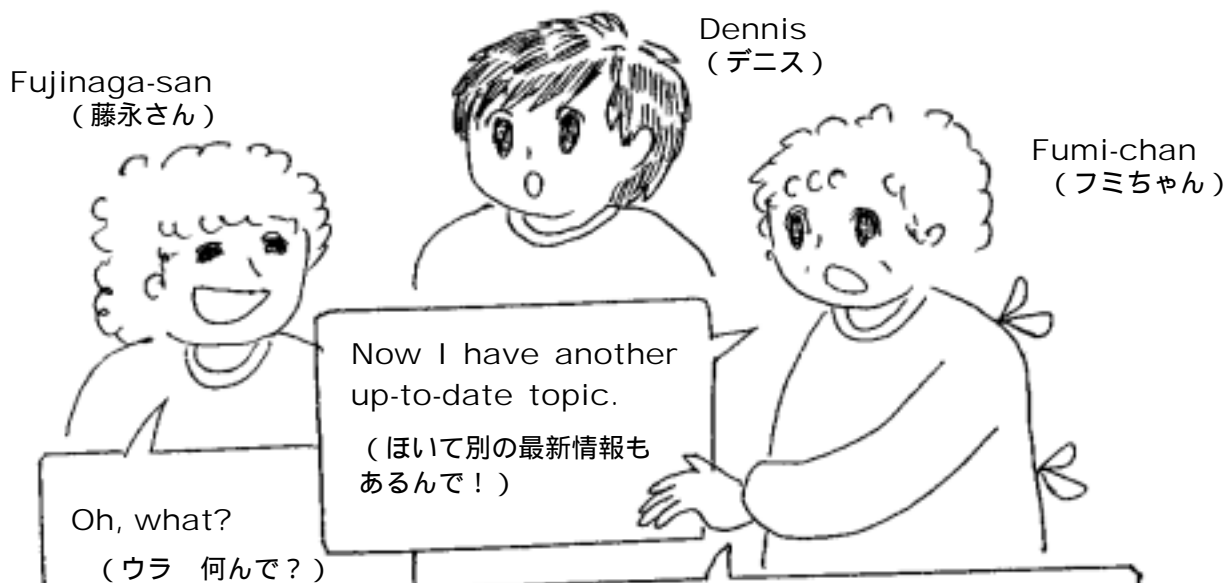


かすどろを作るときに必ず思い出す酒粕のもう1つの食べ方があります。それは酒粕の網焼きです。板状の酒粕を食べやすい大きさに切って網で焼き、焦げ目のついた物をそのまま、あるいは砂糖をつけながら食べたものでした。

昔、多くの祝島の人達が、杜氏として造り酒屋で活躍されていたからでしょう、上質の酒粕を、冬になるとどっさり頂くことがありました。そうしたとき、決まって、この焼いた酒粕やかすどろが家族の楽しみとなったものです。酒粕とは言え、アルコールが残っているので、私達子供の頬は赤くなったりしていましたが、もう半世紀近く前の思い出です。

Part1. Dennis's first visit to Iwaishima (7)

* デニス是我的友達です。



The height of the stone wall in Iwaishima has just been recorded as No.1 in Japan.
I read the news in the newspaper recently.
Don't you think that's great ?

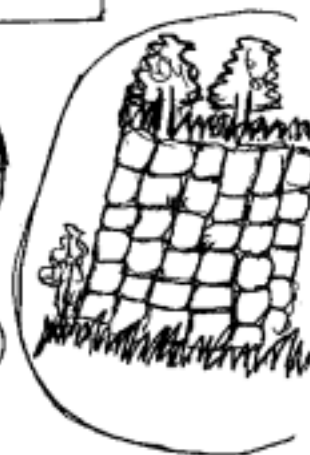
(祝島の石垣の高さが日本で一番いうて登録されたんといで。最近新聞でそのニュースを読んだんで。こりませえ、せえがえい思わんで?)

The stone wall is really great.
It was built with larger stones than that of the school.

(あの石垣は本当にすごいんで。学校の石垣よりずっとおっけえ石を使うちよるんじゃけえ。)



Hashibe-san (橋部さん)



(あらすじ)
デニスは、橋部さんに祝島の歴史を教えてもらっていましたが、そこに藤永さんが乱入してフミちゃんと二人で最近の話題

で盛り上がっています。今回は平さんの田んぼの石垣が日本一高かったという話題です。ところで、歴史の話はどうなってしまうのでしょうか・・・?

活動紹介

2004年版「祝島卓上カレンダー」ができました



毎年恒例になりました「祝島卓上カレンダー」を、今年も制作いたしました。会員の皆様のお手元には、年末には届いたことと思います。1年間どうぞご活用ください。

カレンダーには、昨年までは写真を使っていたのですが、今年は新会員の重村通子さんの描いたイラストを使ってみました。タイトルは「祝島の思い出」。懐かしい祝島の雰囲気がよく出ていると思いますが、いかがでしょうか？

お知らせ & 募集

今年は神舞です！

皆さんもうご存知と思いますが、今年は神舞年です。日程も8月16日～20日に決定しました。お盆休みの直後になりますが、しっかり休暇を取って帰ってきてください。準備中のお手伝いや本番での權伝馬のこぎ手募集など、ボランティア募集の際は、メーリングリストやホームページでお知らせいたしますので、可能な方はぜひ積極的にご協力ください。みんなの力で伝統の神舞を盛り上げましょう！



神舞の苫編み作業

尚、祝島ネット21の「神舞基金」には、2004年1月現在、219,875円がプールされています。このお金は今年の神舞開催のため、全額を神舞奉賛会に寄付させていただく予定です。

今年の「祝島不老長寿マラソン」はお休みです

2001年から毎年夏に開催してきました「祝島不老長寿マラソン」ですが、今年は神舞が行われるということで、準備等が重なってしまい大変ですので、お休みとさせていただきます。ランナーの皆様にも大変好評をいただいておりますので、残念ではありますが、私たちとしても今年は神舞の準備の方に専念したいという気持ちが強く、また協力いただいている島民の皆さんへの負荷や、島外から帰省される皆さんの帰省の日程も考慮すると、やむを得ないと判断しました。

来年からまた復活する予定でありますので、そのときはご協力お願いします。

編集後記

寒い日が続いていますが、皆さんお元気ででしょうか？ 今年の祝島はお正月の間は凧の日が続いていましたが、暦の大寒に合わせるように急に冷え込み、1月23日にはめずらしく雪も積もりました。下の写真は、その時に撮影したものです。雪と練り堀の組み合わせもなかなかオツなものですね。

ところで、練り堀といえば、3代で日本一高い田んぼの石垣を築いた平さんに、先日、練り堀の話を伺う機会がありました。丈夫な練り堀を作るには、土の成分（やせた土が良い）と練り方（とても硬く練る）が非常に重要なのだそうです。練り堀というどうしても石の方が目立っているように思いますが、じつはその隙間に入っている土の方が大切なんですね。目からウロコでした……。

さて、すでにお気づきと思いますが、今回から表紙の目次の下の欄には「祝島の昔の遊び」シリーズを掲載することにしました。描いてくれるのは、今年の卓上カレンダーの絵も描いてくれた重村通子さんです。1回目は「まりつき」。おかつば頭とブルマーが時代を感じさせてくれますね。これからどんな懐かしい遊びが登場してくるかお楽しみに！

もうすぐ立春。春もすぐそこまで来ています。次号は4月発行の予定です。

（編集長：國弘秀人）

事務局では会員の皆さんからの投稿をお待ちしております。ご意見・ご感想・身近な情報など、お気軽に投稿してください。
祝島ネット21では随時会員を募集しています。

《発行》 祝島ネット21事務局
〒742-1401 山口県熊毛郡上関町祝島
ホームページ <http://www.iwaishima.jp/inet21/>



雪の練り堀通り